

魯迅の日本留学 東京・仙台・東京

生涯学習センター公開学術講演要旨

知の市庭会員 阿部兼也（東洋大学教授）

魯迅の日本留学（1902～09）

1）東京弘文学院で日本語を学ぶ（02年5月～04年9月）。

・成城学校の予定を急遽日本側の都合で変更 / 明治東京清国留学生受け入れ事情

・弘文学院「三矢入牛入」事件 / 日中学生観の違い / 「清国留学生取締規則」（1905発布）

2）仙台へ（1904年9月～06年3月）

・日露戦争の真っ最中：出征兵士壮行会 / 市民祝捷会（9月は遼陽陥落祝捷会） / 一軒目の下宿の主人佐藤喜東治氏は祝捷行列係員となる。

3）当時の社会背景として中国情勢：

・列強の侵略：アヘン戦争1840（南京条約、香港租借） / 英仏戦争1856（アロー号戦争、天津条約、長江解放、アヘン貿易自由化） / 愛琿条約（1858、ロシア黒龍江を国境とする） / 北京条約（1860、ロシア沿海州を獲得） / 日清戦争1894（下関条約、台湾割譲）

・国内の動乱：太平天国1851～64 / 仇教運動1860～1901・義和団運動1900

・近代化の動き：洋務運動1860～1894 / 変法自強運動1895～1898 / 中国革命同盟会1905 / 辛亥革命1911

・権力闘争の政変：戊戌の政変1898

4）日清戦争による衝撃：

・日清戦争で中国知識人は衝撃を受け、近代化の必要性を痛感 さしずめ欧米の武力、日本の兵力 しかし儒教の文治主義（「孝経」）に真っ向から違反し、それゆえ軍隊嫌悪、兵隊

蔑視が社会通念だった。

軍隊を強くするには、その社会通念ぐるみに変革しなければならず、社会の構造や世界観の変革へとつながらざるを得ない。

・日本の明治維新は、その種の変革をやったのけたらしい。なかでもその象徴が徴兵制。(日清戦争前の中国での日本に関する新聞報道：婦女子も徴兵、逃亡相次ぎ林間で自縊する兵士続出、などと報道され、徴兵制がきちんと機能を発揮するなど想像もつかなかった。)

清国政府は知識青年の日本留学を積極的に推進。 魯迅たちも日本留学した。

5) 東京弘文学院で日本語の勉強。同郷グループで同人雑誌を発行するのが流行した。

魯迅たちは「浙江潮」を発行。魯迅は『中国地質略論』(1903年10月号)を発表し、浙江省内地地下資源の採掘権売却を阻止する事案(1903年8月～：劉鶚の事案)に参画し、阻止に成功した。魯迅はそこで近代科学によって、革命運動に参加できると確信した。

6) 仙台医専で医学の勉強：後の作品「藤野先生」に述べられる藤野巖九郎教授による「解剖学」の指導と勉学の経緯。そのなかで、藤野巖九郎先生と魯迅が衝突したり、魯迅がとまどったりしたトピックスは：解剖図と絵画、死者の靈魂問題、纏足問題などがかたられている。

習俗を無視する藤野教授

それが可能なのは近代的学術の精神による。

7) 魯迅の眼に映った日本・仙台：

・兵制の日中比較 日露戦争・祝捷会・徴兵制：

河北新報明治37年12月20日記事「軍人の家族餓死す」、義捐金募集

・凶作対策の日中比較 明治38年凶作。宮城県知事「何とか餓死者を出さずに乗り切ることができた」と。/ 中国江蘇省丹徒縣の凶作暴動1904年：軍隊出動、農民2名が死亡。

8) 仙台を離れて東京へ、文学活動に入る。約15年後に自伝的な文章で仙台時代に言及し

始めた。以後しばしば言及している。

魯迅が仙台時代に言及している作品：

- (1) 《呐喊自序》(1922)
- (2) 《ロシア語訳本阿Q正伝序及び著者自叙伝略》(1925)
- (3) 《朝花夕拾・藤野先生》(1926/10)
- (4) 《朝花夕拾・瑣記》(1926/10)
- (5) 《魯迅自伝》(1930)

主要には、(1)と(3)。

9) 文学へと転向した理由を自分で説明しているが、訝しさがある。

(1) 「呐喊・自序」の訝しさ。

・医学を選択した(1904年9月) 理由は三つ：

）漢方医のペテンを阻止しよう、

）戦争では軍医になろう、

）日本の明治維新で西洋医学は人々の近代化への認識を広げて、意識変革に役立ったという、

(2))しかし、「呐喊・自序」では言っていないが第四の、しかも最大の理由として、近代医学による革命への参画があり、その具体的課題として、「漢民族を人種として強化したい」があった(東亜日報上海特派員申彦俊記者へのコメント)。

科学と革命の結合に、「中国地質略論」で一度は成功し、そのため医学の選択にも革命との結合を企図し、「人種の強化」でそれが可能と考え医学を選択した。

・医学放棄の理由の訝しさ：

ロシア軍スパイの中国人を日本軍が処刑する幻灯シーン

「同胞の処刑を周りでただぼけーっと見ているだけの中国人」「体がいくら丈夫でも、見せしめやその観客になるばかり。だから肉体よりも精神だ」と説明した。

しかし、

日本軍にむりやりつれてこられた中国人たちは、日本軍のご機嫌がおさまるのを、我慢してやり過ごすしかない。さえない顔しているのは当然。それが「ぼけーっと」見えるのは無理もない。魯迅がそれに気付かぬはずは無い。

(3)「藤野先生」では、この「幻灯事件」には言及があるが、「肉体よりも精神だ」には言及がない。

10) だから、医学を棄てるには、ほかに理由があった。

- ・医学を選んだ最大の理由「漢民族を人種として強化したい」は、誤解に基づいていたと判明したこと。

- ・日本の徴兵制や凶作への対応を目の当たりにして、中国の募兵制や凶作での犠牲者発生との比較が可能となり、中国の遅れの深刻さを、あらためて痛切に認識した。

- ・試験問題漏洩の噂：その噂は実在したが、しかし試験結果はすでに公開掲示され魯迅の解剖学は不合格とみな知っていた。先入観と中国人蔑視の風潮による中傷。

個人の存在を無視して、大勢の流れに抵抗しないと、日本人の軽薄な全体主義的傾向への警鐘でもある。

- ・藤野教授による「解剖学」の指導から得られた、中国社会に対する疑問

たとえば藤野先生のように、近代的学術の精神は習俗などを無視することがある。

その過激さに、中国社会は耐えられるのか？

やがて医学から文学へと転向。その精神的な背景の幾つかであろう。

11) 魯迅による仙台医専留学の総括。

- ・「小にしては中国のため……、大にしては学術のため……」（『藤野先生』）

12) 東京へ（1906年4月～）

・医学を棄てた後始末

(1)「進化論」的社会観の克服 / 07年12月「人之歴史　ドイツ国ヘッケル氏の種族発生学の一元的研究の解説」を執筆発表（生物進化論と古生物学・化石学と人類進化論を統一的に把握し、中国の人類・世界発生伝説との比較にも言及）

(2)文学・詩の發揮する精神の力を、革命を進める上に必須のものと主張 / 08年2月「摩羅詩力説」を執筆発表（被抑圧民族の解放や、弱者の解放の歴史の中に、それを促す力としての文学・詩を世界文学の歴史潮流の中に探求、悪魔派の系列に象徴されると論究。たとえば思想的にはニーチェを、文学的にはバイロンの詩と行動力を激賞する）

(3)西欧近代科学の歴史を思想面を重視して探求 / 08年6月「科学史教篇」を執筆発表（西欧における科学技術の進歩の歴史を概観。ギリシャ・ローマからアラビア、ルネサンス・デカルト・ワット蒸気機関・フランス革命、そして現代へ。科学技術をそれを生み出した思想・精神の角度から論述）

(4)人間解放による個性尊重と天才による科学技術・社会進歩の必要性を主張し、同時に物質主義に陥ることの警戒 / 08年8月「文化偏至論」執筆発表（ニーチェの超人やキルケゴールに傾倒） /

13) 文学への転進と帰国（～09年8月）

12)の著述とともに、東欧など被抑圧国の文学の、短編・小品の翻訳紹介を平行して進めていた。 / 実弟の周作人とともに「域外小説集」という外国文学翻訳紹介の定期刊行物を計画し編集発行、さっぱり売れず2号で打ち切り。（第1冊09年3月東京で発行、第2冊は7月上海で発行）

14) 魯迅の留学の意義　中国における近代的精神の父となる。

(1)西欧近代科学を、それを生み出す近代合理主義の精神とともに発見した。

(2)それを基本理念とする社会の存在することを発見した。

(3)中国が遅れを克服する上に革命（清朝打倒）が不可避であることの確信。

(4)科学的近代精神を中国に普及し啓蒙することの必要性を痛感。

(5)それらを総て生涯をかけて実行し推進した。

15) 辛亥革命は1911年、その間1905年には東京で中国の体制を作り変えるための組織が作られた。即ち宮崎滔天の斡旋を得て、孫文(興中会)・黄興(華興会)・章炳麟(光復会)が合同して中国同盟会が結成された。なおまた、さらにのちの五・四運動(1919年)の中心スローガンは『民主と科学』だった。

以 上

・『呐喊自序』の訝しさ(1922年2月)

(2): 医学放棄の理由の非現実性、『呐喊自序』と『藤野先生』(1926年10月)とを比較
『藤野先生』では言及されない放棄の理由 医学によって人種強化ができるとは誤認であると気付いた。

魯迅が留学するまでの学校生活・家庭・社会状況

・遅れた中国:

アヘン戦争・日清戦争(1894年7月、黄海海戦顛末)、/ 義和団事件

天子が天下を所有(儒教理念、兵制・税制・科挙)/ 気による自然観・生命観、

・紹興での学校生活・家庭状況(1881~1898年):

科挙の受験勉強(1887年~)、三味書屋入塾(1892年~)、曾祖母の死、祖父の帰郷・科挙裏口工作の失敗・入牢(1893~1901年)、家の没落、質屋・薬屋通い、父の病死(1896)

・南京での学校生活(1898~1902):

水師学堂から転学して陸師学堂附属礦務鐵路学堂に入学、科挙受験、地質学・製図、新聞投稿賞金、乗馬、天演論(社会進化論による危機感)、席次三番で卒業、日本留学へ、

2) 社会状況、中国の立ち遅れを認識。

- ・紹興同郷公函(1903年1月)：

日本の教育・経済・工芸・政治などを知るにつれて、中国の遅れの落差が具体的に見える。
危機感 故郷の若者に日本留学を勧める。

< 参考 >

(魯迅の作品理解の上で重要な伝記資料である自伝 歴史事実との内容的・時間
的距離 魯迅の体験時から創作時までに進んだ時代・社会の急転)

自伝的な要素を多く含む魯迅の作品：

《魯迅自伝》の主内容：

- ・1881年紹興に生まれた。父は読書人、母は本が読める程度の学力。

自分が幼い頃は、可成りの農地を持ち、生活には困らなかった。

・自分が13歳の時突然大きな災難にあい、すべてを失う。親戚の家にあずけられ、時には乞食といわれたりした。

- ・その三年あまり後に、父が病気で死んでしまった。

- ・学費が出せない境遇となったが、それでも学費の要らない学校をさがした。

お定まりの幕友と商人にはなりたくなかったからである。

・18歳の時、南京に出て、水師学堂に入り、約半年後に礦路学堂に移り、卒業して日本留学に派遣された。

・東京での予備教育を受けた頃、医学を専攻しようと決心した。その理由は新しい西洋医学が日本の維新に大変役立ったらしいからである。

・当時は日露戦争の最中だったから、偶然映画の中で中国人がスパイを働いて、斬り殺されるシーンを見かけたことが原因で、気持ちが変わった。中国では、何人かを健康にしてやっても、意味がない。もっと広大な影響のある運動が必要のようだと、.....まず新しい文芸を提唱すべきだろう、と。

・学籍を捨てて東京にもどり、何人かの友人と小さな計画を建てたのだが、つぎつぎと失敗した。ドイツに行こうと考えたが、それも失敗した。

- ・ 母親や親戚達に、経済的に手伝って欲しいと言われて、帰国した。その時29歳だった。
- ・ 帰国するとすぐ、杭州の両級師範学堂で、化学と生理学の教員になったが、翌年には逃げ出して、紹興中学堂で教務長をつとめたが、その翌年にはまた逃げ出した。しかし行き場がなく、ある本屋の編集翻訳員になろうとしたが、最終的には実現しなかった。
- ・ やがて革命となって、紹興が光復を迎えて、自分は師範学校の校長になった。
- ・ 革命政府が南京に成立し、教育部の部員に招かれ、政府が北京に移ると共に、自分の北京に行った。
- ・ 後には北京大学、師範大学、女子師範大学で国文系の講師を兼任した。
- ・ 1926年に何人かの学者が、段祺瑞政府に密告したために、逮捕されそうになった。その時は、友人林語堂のたすけで廈門大学の教授となり、その12月にはそこを逃げ出して、広東の中山大学の教授になり、4月には辞職して9月には広東を離れて、その後ずっと上海に住んでいる。
- ・ 留学している時、雑誌に不出来な文章を載せたことがある。
- ・ 初めて小説を書いたのは錢玄同に勧められて、《新青年》に載つけたものである。その時初めて魯迅という筆名を使った。その他の筆名を評論や短文では使っている。
- ・ 作品集として出版したのは二つ、《呐喊》と《彷徨》、外に論文一冊、回想記一冊、散文詩一冊、短編評論集四冊である。
- ・ その他、翻訳の外には《中国小説史略》一冊、編定した《唐宋伝記集》一冊がある。
- ・ 日付：1930年5月16日

以上